## ■初心マルティナさん in ぱふぱふバイト

◆

――冒険中、あろうことかカジノで一文無しになってしまった一同。
今後の道中のため、マルティナは仲間に内緒で ぱふぱふ娘として資金集めをすることに決める……

持ち前の美貌により、即座に採用されたマルティナ。
なるべく金になるようにと、裏路地から富豪の息子を狙って誘いをかけていく。

「ね、ねえ、そこの坊や……その……ぱふぱふ、は……いかが……？」

少年を誘惑するという慣れない行為に、緊張が隠せないマルティナ。ぎこちない勧誘だったが……

【……お姉さんがしてくれるの？】
「え、ええ、そうよ。たったの、２０Ｇなんだけど、その……」
【お姉さんが？　たったの２０Ｇ？　じゃぁお願いしよっかな♪】

マルティナの容姿で格安の値段。それを聞き、二つ返事で了承した少年。
すぐにぱふぱふサービス用の小屋に入り、ベッドの前まで案内する。

「改めて……マルティナよ。よろしくね……その、ところで、私……」
【うん、よろしくー。あ、マルティナさん、ぱふぱふ初めてなんだよね？　わかるよー♪】
（っ……！　こんな小さな少年に見透かされるなんて……やっぱり たどたどしすぎたかしら……
それともこの子、もしかして経験豊富なの……？）

あっさりと経験がないことが見抜かれ、リードするはずが逆に主導権を握られてしまう。
その後もジロジロと胸を見られ、マルティナはどうしていいか分からず後手に回るのみだ。

「そ、そうなの……。だから、その、うまく出来ないかもしれないけど……がんばるから……」
【うわ、マルティナさん スゴい爆乳だね！】
「え、ええ……どうも……」
（……こういう場では、褒め言葉なのよね……？　まぁ、ぱふぱふ……なんだし、見られるのは当たり前……よね……）
【でも最近は詐欺とかあるらしいからな～。服で寄せてたりしない？】
「寄せたりなんてしてないわ。だからその点は、安心して……」
【ふ～～ん……】

間近で胸を凝視される。たマルティナの胸乳は少年が爆乳と称するだけあり、顔ほどもある見事なサイズを誇る。
マルティナ自身は意識していないが　服の形状も胸を強調しているらしく、街ゆく男たちの眼を惹きつけている。
少年も例に漏れずマルティナの胸を評価したからこそ誘いに乗ったのであり……
本物かどうか確認するためにと、吐息がかかるほど接近して眺めている。

【うん、たしかにこれは本物だね！　これはなかなか……】
「！　ま、待って……！」

少年がおもむろに手を伸ばし、胸に触れようとしてきた。マルティナは慌てて躱し、両腕で胸を庇う。

「お客から触るのは、禁止のはずよ……」
【ええー？　サービス悪いなあ。まあ初めてなら仕方ないか。じゃ、早速ぱふぱふしてよ】
「え、ええ……じゃあ、いくわよ……」

慣れた者であれば　ある程度はサービスするのかもしれないが、まだ抵抗感が拭えない今のマルティナには不可能だ。
余興も出来ないと知った少年に率直にぱふぱふを求められ……マルティナは人生初となる ぱふぱふを実行する。
少年の頭に手を回し、優しく胸に抱き寄せる。

大きくハリがあり弾力に富む、それでいて柔らかい胸に顔が触れる。
服越しとはいえ初めて胸に男、しかも顔が触れるが、嫌悪や緊張をしている場合ではない。
そのまま引き寄せ、谷間で挟もうとし……そこで少年の方も動き、挟むというより　うずめられることになる。

「ぁっ……！」
（この子、やっぱり慣れてる……！）
【うわぁ、これがマルティナさんのおっぱいかぁ！　弾力はあるし、柔らかいし……それにイイ匂いがするよ♪】
「……どうも……」
（胸に、顔が埋められて……　な、なんか、変な感じ……）
【ほら、ボーってしてないで、左右から包むようにしてよ】
「え、ええ、ごめんなさい……」
（緊張……かしら……なんだか、胸が、火照ってくる……♥）

言われるがまま、自分の胸で少年の頭を左右から圧迫。
胸の量感と柔らかさもあり、まさに『ぱふぱふ』という音が聞こえそうな行為。
男にとっては　さぞ優越感や幸福感に満たされるサービスなのだろう。少年は幸せそうな表情でぱふぱふに身を任せている。
対し……マルティナは、困惑していた。軽度のものとはいえ、男に性的サービスをすることに対する忌避もあるが……
それと同時に、胸奉仕で自分が興奮していることに対して困惑していた。

ぱふぱふ小屋は男女共に興奮できるよう、媚香が焚かれている。
それが早くも影響しているのか、胸で少年を圧迫する感触で僅かだが快感を得てしまっているのだ。

（これ……やっぱり変よ……♥　こんなことで、気持ち良く……っ♥）

奉仕して感じてしまう。その困惑で、マルティナは圧迫を緩めてしまう。

【あれ、ちょっとちょっと……マルティナさん、ちゃんとやってる？】
「ご、ごめんなさいっ」
【全然慣れてないね～……ま、そういうとこもいいけどね】

初々しいところさえ愉しまれ、快感に加え羞恥で顔が朱くなってしまう。
しかしサービスはちゃんと与えなければならない。『旅のために仕方なく』と自分に言い聞かせ、その後も何とか ぱふぱふを続けていく。

「ぱふ、ぱふ……ぱふ、ぱふ……っ♥」

少年に言われて声でも奉仕。初めてなりに懸命にサービスを続け……

【あ～～♪　いいよ、その調子その調子……】
「……その、……そろそろ、時間……」
【えぇ～？　しょうがないなぁ……まあまあよかったよ。見た目はいいし、爆乳だし……また次もお願いしよっかなー】

終了の時間となり、渋々と離れる少年。だがマルティナのぱふぱふにはそれなりに愉しんだようだ。
気に入ってくれたようで、次の予約も入れてもらうことになった。

（またこの子の相手をするのか……でも、富豪のお得意様なら……）
「どうも、ありがとうござ……」
【次もよろしくね♪】
「ひゃんっ♥　お、お触りは禁止よっ！」

去り際に軽く尻をはたかれる。この不意打ちにマルティナは不覚にも驚愕だけでなく快感も与えられ、素っ頓狂な声を出してしまう。
イタズラに叱るマルティナだが、既に少年は小屋から出ており……ベッドには、ぱふぱふ代金が置かれていた。

（……これで、ようやく２０Ｇ……）

プライドを投げ打って緊張と羞恥にまみれ、ようやく手にした２０Ｇ。
比較的短い時間で稼げたとはいえ、女の……自分の身体の価値を突き付けられるマルティナであった。

◆
――バイト 二日目。約束通り少年と待ち合わせをする。

【今日もよろしくね～♪】
「ええ、こちらこそ……あっ！　もう、またっ……」
【ちょっとぐらいイイでしょ？　ほら早く早く】

ぱふぱふ小屋へと入っていく途中、また少年がセクハラを働く。さり気なく尻を触り、悪びれることもなくぱふぱふ小屋へと入室。

（いつまでも主導権を握られっぱなしなのは癪ね……お望み通り、早く済ませましょう）

注文通り手早く済ませる。そのつもりだったが……

【う～～ん……もっと、ギュッて感じでさぁ】
「わ、わかってるわ……」

やはり性のサービス……そして快感は、一度や二度で慣れるものではない。

【おっぱいはいいんだけど……まだテクは全然なってないなぁ】

なかなか上達しない胸奉仕。それに苛立ったか、少年はマルティナが困る隙に回り込み、背後から爆乳を鷲掴みにする。

【もっとこう、ぎゅむっとね！】
ぎゅむぅっ♥
「ふぁっ♥　や、やめなさい！　お客からのお触りは禁止だと……」
くりくりっ♥
「ああぁっ♥」

急に胸を揉まれ、媚香を吸って興奮状態にあるマルティナはつい甘えた息を漏らしてしまう。
だが度を超えたイタズラを放置するわけにはいかない。　流石に叱り付けようとするが、少年の指が瞬時に乳首も刺激。
素早く捏ね回され、淡いものではなく明確な性の快感が電流のように奔り抜ける。

【なんだ、やっぱり感じまくりじゃん。ぱふぱふなんてやってるスケベ女だし、こういうの期待してたんでしょ？】
「ち、違うわ！　いいから、やめなさい……っ♥　あ♥　やめ……♥」
（何なの、この感覚っ？　ダメ……何か、クる……っ♥）

好き勝手言われ、怒りと嫌悪が込み上げる。……はずなのに、少年を押し退けられない。
怒りも嫌悪も乳首の愛撫が生み出す桃色の感覚で中和され、身体から力が抜けて抵抗することができないのだ。
そのまま乳首を弄られ続け……蓄積した甘い感覚が乳首だけでなく胎の底から湧き立ち、一気に沸騰する。

「やめ……♥　あ♥　ダメ♥　何か……おかしく……っっ♥♥」
くりっ♥　ぎゅりぃいっ♥
「あああああああっ♥♥」

急激に身体中を駆け巡る快感の電流。初めての行為、初めての感覚に、マルティナは桃色の感覚の中で身を震わせ困惑するしかない。

（な……♥　何、これ……♥　こんなの……初めて……♥）
【あーあー……マルティナさん、接客中にイッちゃったよ】
「ふぁ……？」
（イク……？　これが……？）

話でしか聞いたことがない、性的快感の絶頂。
ようやく初めて体感したのだが……それがよりによって少年の強引な乳首責めによって与えられるとは思わなかった。

【あれ、もしかしてイクの初めて？　慣れない感が全開なんだけど】

「……え、ええ……」
【ま、敏感なのはしょうがないけど……だからってそれを言い訳にしないでよね】
「ご、ごめんなさい……」

絶頂したことを繰り返し責められる。
何が悪いか分からないが、このままでは代金を払ってもらえないのではと焦ったマルティナは謝るしかない。

【うーん、そうだなぁ。じゃぁパイズリしてよ。そしたら許してあげるからさ】
「パイズリ……？」
【おっぱいで挟むんだよ。顔じゃなくてチンポをさ】
「ちんっ……？！　そ、それはダメよ！」
【でもあんなことされたら、もうぱふぱふだけじゃ足りないって。客に奉仕せず自分一人だけ先にイッたって店にチクるよ！】
「ぅ……それは……」
【じゃ、決まりだね】

強引に決めると、少年が股間を露出させる。そこには背丈に見合わない、巨大な肉棒が反り立っていた。

「――ッッ？！」
（な、なによこれっ？！）

男性器についての知識は少ないが……少なくとも、少年のものは今まで見たもののどれよりも巨大であった。
漲る肉感は鉄の様であり、硬く勢力に溢れているのが見て取れる。
また匂いも強烈であり、不用意に一嗅ぎしたマルティナの胎まで直接届いたかと思えるほど、牝としての本能に駆り立たされる。
マルティナは生まれて初めて、性欲というものを自身の内に感じていた。

（なに……この、凶悪なものは……？　でも……なぜなの、私の身体が……あれを欲しくてたまらなくなってる……？
でも、そんなことしたら……♥　今は……胸が、敏感になってる……！　こんなものが触れたら、どうなるの……♥）

未知の行為と感覚に、恐怖と同時に期待を抱いてしまう。
やはり抵抗は強く残るが……客の機嫌を損ねてしまった今、やるしかない。

「……今回、だけよ……」
【やった♪　ほら、早く早く！】

反り立つ肉幹に胸を近付け、谷間と触れる。初めて味わう雄の熱は想像以上であり、逡巡するも、そのまま谷間の奥へと包んでいく。

（あ……熱い……♥　やっぱり、今は敏感になってる……♥　こ、ここから……えっ？）

胸で包んだ後、更に扱くのだが……そこでまた驚愕。
なんと少年は巨根はマルティナの爆乳でも収まりきらず、先端が谷間からはみ出ているのだ。

（凄い……！　な、なんて大きさなの……♥）

凄まじい存在感に圧倒される。ただ胸で挟んでいるだけなのに、まるで本当に犯されているかのように錯覚しそうなほどだ。

【ほら、ボーッとしてないで……その自慢のおっぱいで扱いてよ】
「え、ええ……っ！　ん、くぅ……っ♥」

指示に従い、挟んだまま胸を上下させ、肉棒を扱く。
呆れるほどの大きさなので扱いやすく、その点については問題がないのだが……
『雄』そのものに触れる興奮、熱く硬い感触は　ぱふぱふ以上に心地よく、押し付けるほど逆に圧迫されて吐息が漏れる。
お客に奉仕するはずが、むしろ自分の方が気持ち良くなっていくのだ。

【あぁ……柔らかくて、スゴい圧迫感……超気持ち良いよマルティナさん】
「そ……そうなの……んっ♥　それなら……っ♥　よかった……くぅぅんっ♥」
【どうしたのマルティナさん、大丈夫？　もしかして……】

「だ、大丈夫……！　気持ち良くなんかないわ……あぁっ♥」
【誰もそんなこと聞いてないんだけど……え、もしかしてホントに気持ち良くなっちゃってる？】
「だから、大丈夫だって言って……んっ♥　はぁ、この……っ♥　あはぁぁ……♥」
（胸が……♥　気持ち良すぎる……♥）

ただでさえ敏感になった胸が更に刺激され、快感が全く引いていかない。
乳首は痛いほど張り詰め、布と擦れただけでビリビリと痺れるような疼きを生む。
肉棒を前に牝としての情欲が昂ぶったか、唇が物欲しそうな半開きになって湿っぽい息が止まらない。

【マルティナさん……もしかして、パイズリだけじゃなくてフェラまでしたいの？】
「フェ……っ？！　な、何を言って……」
【遠慮しなくていいって♪　そんなに欲しいならブチ込んであげるよ、ほらっありがたく咥えろっ！】
ずぼぉっ♥
「んぶぅぅっ？！」

潜在意識を見透かしたのか、少年はマルティナの乳首を抓り上げると、無理矢理に引き寄せて唇の中に亀頭を突っ込ませた。
ぱふぱふだけのはずが、パイズリのみならず同時にフェラチオまでさせられる。
拒絶しなければならないのに乳首の快感で抗えず、先端を咥え込んでしまう

（熱い……！　苦くて……嫌なはずなのに……！　なのに……っ♥）

初めて咥える雄棒は熱く、苦く、とても心地いいものではないはずだった。
だがその熱と苦さ、雄汁の匂いが、瞬時に牝本能が感覚を桃色に麻痺させ、頭の中が煩悩の熱で侵される。
目覚めた雄への屈従欲により、あろうことか穢らわしいはずの存在を愛おしく、美味しいとさえ錯覚していた。

じゅぶ♥　ちゅぷっ♥　れろっ……じゅりゅりゅりゅっ♥

「んっ♥　んぶ♥　んっぶ♥　んむんんぅっ♥」
（そんなっ……なんでっ♥　こんなものが、美味しく感じるなんて……♥
口の中を犯されるのが……♥　気持ち良い……なんて……♥）
【いいよマルティナさん、口の中も最高だよ！　そろそろ出すよ、飲み込んでっ！】
「んぶぅぅっ？！♥」

更に強く乳首が引っ張られ、より奥に侵入した亀頭が脈打つ。
フェラチオだけでも禁止行為だというのに、口内射精など許すわけにはいかない。
だが性欲に支配された今のマルティナでは、そんな逸脱行為にも逆らえず……

（で、出るっ？！　口の中にっ♥）
ドプゥッ♥　ドビュルルルルルッ♥
「んんんんんんんんっ♥♥」
（出てるっ♥♥　あ♥♥　熱いぃぃぃっ♥♥）

凄まじい苦しみとなるはずの口内射精。だが乳首への刺激と喉奥への精熱で再び絶頂してしまい、その拍子にほぼ全てを飲み干してしまう。
あろうことか精液の味と感触に心地よささえ感じ、気付けば味を堪能しながら嚥下していた。

「はぁっ……♥　はぁぁ……♥」
（そんな……♥　精液を……気持ち良く、思うなんて……♥）
【うわ、ホントに飲んじゃったよ。初めてのフェラで精液飲み干すなんて……
しかもそれでイクとか、マルティナさんは根っからの淫乱なんだね】
「ひ、酷い……っ♥」
【えー？　だってホントのことじゃん。じゃ２０Ｇ置いとくから、また次もよろしくねー♪】

強要されて仕方なく行ったというのに、酷い言いようだ。
しかし浅ましい行為に快感を得てしまっているのも事実。
そのことに失望しながら、マルティナは２０Ｇを受け取るのであった……

◆

——バイト三日目。また少年と待ち合わせし、小屋に入る。

体験版はここまでです。続きは製品版で！